

初めての受け持ち患者さん

看護学生になって2回目の実習で、初めて患者さんを受け持った。90代のA氏は悪性リンパ腫で余命1~2ヶ月であった。実習中何かあったらと思い「死と向き合えない」と受け持ちを迷っていた私に、「死と向き合うのではなく、その人の”生”と向き合うんだよ」と、先生が話してくれ、A氏の担当をさせていただくことを決断した。A氏は余命1~2ヶ月とは思えないほど明るく、よく食べ、よく話し、よく笑った。一緒に援助していた恰幅の良い看護師の前で「ここはお相撲さんみたいな看護師さんが多いねえ」と言い放ち、私が冷や汗をかいたこともあった。他の学生にも優しく、病棟の学生の人気者だった。私は余命の話など嘘だと思ったかつし、休みの週末は「どうか何も起こらないでくれ」と願った。

A氏は元教師であり、身なりに気を遣っていただろうと思い、先生と相談して毎朝髭剃りをさせていただくことになった。A氏も喜んで受け入れてくれた。最初は私がすべて髭剃りを行ったが、2日目以降はA氏に電動カミソリを持って髭剃りをしてもらい、細かい部分を私が行った。最後に、自分で顔を触って剃り残しがないか確認してもらうことを大切にしていた。今まで生きてきたA氏の生活を考えて行ったことだった。身なりを整えることは、A氏が大切にしていたことだったと思う。洗髪、清拭の援助もさせていただいた。洗髪の計画を立てた日、腫瘍の影響で高熱が出て援助を取りやめたことがあった。その日の担当看護師との反省で、計画した援助ができなくて残念だったと話す、看護師から「援助側の自己満足は援助とは言わない。患者さんのニーズと援助の必要性が合った時に初めて援助と言える」と助言を受けた。援助する側の心構えを教わった大切な言葉になった。翌日には熱が下がり、清拭も洗髪も行うことができた。髭剃りも行い、年齢や病気を感じさせない佇まいになった。その後、ご家族や友人の方がお見舞いに来られ、綺麗な身なりで会っていただけた。突然の訪問にA氏はとても嬉しそうだった。人と話すことが本当に好きなのだと思ったし、家族や友人と会って話せる喜びを私も改めて感じさせられた。ご家族や友人も、清拭や洗髪の後でさっぱりして綺麗になったA氏を見て嬉しそう、私にまでお礼を言ってくれた。援助する側として本当に嬉しかった。

2週間の間、A氏は少し食べられる量は減ったが、他に変わったところはなく実習は終わった。最後の挨拶に行った時、私と会えなくなるのが残念だと言ってくれ、握手をした。そのあたたかい手からはまだまだ生きるぞというエネルギーを感じた。A氏が亡くなったと聞いたのはそれから3か月後だった。亡くなる前日まで食事ができたと聞いて嬉しかったが、泣くのを我慢できなかった。病気や死と向き合うのではなくその人の「生」と向き合い、その人の大切なことを大切にできる看護師になりたい。